

な組織形態が必要だとの議論もじゅうぶん成り立ちうる。だが、イスラム社会は、どの点から見ても、そうした道筋を選択してこなかった。

イスラムの思想家たちは、民主主義を拒否する傾向をもっており、それは、二つの根拠によっているのだが、そのいずれもが疑わしいものである。まず、イスラムは疑う余地のない基本的な教義を受けられるよう求めているのだが、民主主義は、絶え間のない議論と質疑を不可欠だとしている。よって、この二者は相容れない。この二者が相容れない本質をもって一つの例として、私たちは、イスラムの主権は神に属しているが、民主主義の主権は国民に属しているといった主張をしばしば引き合いに出す。この種の主張は、イスラムが非理性的で無条件の信仰を強いる宗教であることを前提条件としている。これは、コーランに記述されているイスラムとはまったく相容れない。そればかりではない。そうした主張は、政治とは人と人との関係の調停であるにもかかわらず、それが人間と神のあいだの関係であることを前提条件としている。しかしながら、西欧の民主主義政体として、完璧であるわけではない。その一例を挙げれば、西欧の多くの国々が、民主主義的な政治には女たちを加えなければならないとの認識に達したのはあまりにも遅かったと言いうことができるだろう。民主主義は、人々が協力しながら生きていこうとするそのほかの努力と同じように、開かれた質疑応答の原則にもとづいている。その一方、宗教は、人々の同意に依存しており、それを受けいれることによって始まり、それを解釈することによって終わる。それをもっとも単純化すれば、宗教を受けいれたのは私たち人間であって、宗教が私たちにそれを強いたわけではない。固有の信仰をもって社会における民主主義は、この事実を反映したものでなければならない。

イスラムと民主主義は相容れないとするもう一つの根拠はさらに凡庸である。それは、「民主主義は西欧の政体であって、イスラムとはなんのかわりもない。したがって、それを拒否するのに理由など必要ではない」といった幼稚な議論の域をまったく出ていないからである。

イスラム世界を限なく見渡してみれば、様々な地域と多様な社会において根深い分裂と憎悪が渦巻いている。主だった政治集団のほとんどは、それぞれ互いに憎み合い恐れ合っており、敵を打ち倒したりその自由を奪うためであれば、自らの自由を失うことをまったく意に介していない。こうした分裂は、民主主義的な運動の継続を困難にしている。民主主義は、特定の基本的な問題に関する広範な同意がなければ機能することができないからだ。民主主義にとって一つの重要な側面は、一連のプロセスの成果が不確定だということであるにもかかわらず、政治改革の失敗は、我と我が身を滅ぼすことになりかねないことから、じゅうぶんな保証がないかぎり、おいそれとはそれに手をつけることができない。たとえば、パキスタンにおいては、選挙の度毎に敗れた政党の指導者たちは投獄や亡命の憂き目にあっている。

基本的な問題について同意がない現状は、市民生活に宗教が果たしている役割の度合いをさらに高めたいと望んでいる人たちと、それに反対する人たちのあいだのあからさまな闘争によってさらに悪化している。原理主義者集団にたいする支持の増加は、イラン、スーダンにおいて権力の座を占めているムッラー（イスラムの法、教義に深く通じた人に対する尊称）、権力の座から転落したとはいえ今なお大衆に影響をもっているアフガニスタンのタリバンなどと相俟って状況を悪化させ、社会的には優位を占めている非宗教的なエリートも以前にも増して悩ませている。アルジェリアにおいて一九八九年から